

「活動参加者の輪を広げていくために」

日本水循環文化研究協会 酒井 彰

私からのお話については、お配りした発言要旨に、今日、議論したいことを書かせてもらっていますが、改組されたこの協会が、これからどのように活動していくかということについて、私なりに考えていることをお話させていただきます。

設立趣旨書にみる活動理念と事業内容

我々は、実際に活動を担ってきた人たちの数は決して多くはないのに、多様な活動をしてきたということと、それから、多様な活動ができたのは稲場さんというリーダーのおかげというところはもちろんあるのですが、共通の理念を持ってやってきたというところもあるのではないかと考えています。活動の多様さについては、2年前に刊行した日本下水文化研究会の「法人化20周年記念誌」の各論パートの目次を見ていただければ納得いただけるのではないかと思います。海外技術協力、屎尿・下水文化研究、それから WK バルトン記念事業、さらには、多摩川の上下流交流、下水道博物館活動、さらには水循環基本法に関わる運動を支えてきたということもあります。

若干こじつけ的なところはあるのですが、われわれがバングラデシュの都市スラムで行っている活動なども、対象の貧困層コミュニティの人たちが、自らが排泄した屎尿を衛生的に管理しなければ、飲み水を安定的に確保できない状況にありながら、そのことを自覚せずに援助に頼ろうとしている状況がある。そのことを気付いてもらい、自らが水守になって安全な飲み水を安定的に確保できるように支援しているわけなのですが、こういったことも、水を守るという共通の理念のもとでの活動だったと言えるのではないかと考えています。

われわれは NPO ですから、やはり共通理念としての設立趣旨書があります。そこに書かれているのは表1のような内容です。それは、「水守」や「水循環の健全化」ということばで表現されていますが、それを会員や関係者一人ひとりが、関心を持つ課題や地域に応じて、主体的にとらえて、何らかの活動に参加してもらえればと思っています。やはり、設立趣旨書についての共通認識、つまり、共通の目指すものをもっているということが、NPO の活動のベースになるだろうと考えています。本会の設立趣旨書の構成は表-1 のようになっています。

理念共有のほかに、NPO は自由度の高いコミュニティと考えているので、その構成メンバーは、組織や組織の活動に参加しているという自己有用感、達成感や達成の過程での一体感も必要でしょう。自己有用感はどのような組織においても求められることですが、NPO では各人の行動は命令系統に従うというより、組織としての達成目標（ミッション）や個々の活動目的に応じて自発的に行動選択することが求められます。それでこそ、達成感が得られるのではないかと思いますし、責任も伴います。こうした参加や関わり方を通じて、自己実現に、これは NPO に参加することのたいせつな目的ですが、つなげられるのではないのでしょうか。しかし、このような組織としての

表1 設立趣旨書の構成

- | |
|---|
| ① 水循環とは／生活との関係 |
| ② 高度成長期の水循環の変容ともたらされた弊害 |
| ③ 水が私的な利用の対象➡水循環の分断 |
| ④ 社会背景の変化／水循環と人との関わり再構築の必要性 |
| ⑤ 水循環基本法への言及 |
| ⑥ 下水文化＝個人や社会と下水との成熟した付き合い方➡下水文化の枠を超える必要＝「水循環文化」 |
| ⑦ （海外を含めた）これからの活動 |

基盤づくりについても、まだまだ課題が少なくない現状であることも認識しておかなければいけないと思っています。改組してからどういう活動をしていきたいかについて、まず、設立趣旨書でどのようなことが書かれているのか、表2を見てください。これらは、具体的な活動というより、活動目標、ミッションと言えるものです。どのような活動によってこうしたミッションを達成しようとしているかについては、今年の3月ごろ、組織拡充、すなわち新たな会員勧誘を意図して作成したパンフレットで公表しました。そこでは、活動を大きく次の6つのカテゴリーに分けました。

表2 設立趣旨書にみる水循環協の活動

- 水循環の健全化へ向けた行動を実践するための諸能力の向上を図るため、社会学習の機会をつくる
- 自然水循環の諸相における健全性、再構築された水と人との関係をベースとした流域社会のあり様に関する議論を深める
- 水循環に関わる多様な関係者からなる「人の輪」を動かし「水の輪」を形成する
- 流域に暮らす市民と協働し、水循環再生や自然と共生する社会の構築に向け、主体的に行動していく
- 水管理に関する諸制度の整備・拡充、水インフラへの新たな役割の付与など、水循環ガバナンスの向上に資する政策提言を行っていく
- 国際協力活動への言及（脆弱な立場にいる人々の「水守」行動支援）

1. 水循環文化の発掘と普及
2. 社会教育と「人の輪」の形成
3. 水循環に関わる調査研究
4. 国際協力事業の実践
5. 活動成果の社会還元・出版
6. 会員間のコミュニケーション

6つのカテゴリーのもと、18の活動項目をあげています（本会パンフレット参照）。実に多様です。パンフレットですから、会員勧誘を目的に作成しましたが、会員の皆さんにも知ってもらって、こういうことなら参加してみたいということを感じてほしいという気持ちもありました。

改組にあたり取組みたい活動内容

次に、この多様な活動をどのようにスケジューリングしていくのかということについて考えてみたいと思います。「選択と集中」ということがよく言われますが、これは、NPOの自由度を損ないます。選択する人に権力が集中しかねません。基本的には、何かの活動をやろうという人の発意を重視すべきだと思っています。ただし、その活動の「上位目標」、すなわち組織にとっての意義、社会にとっての意義については議論したいと思います。それから、提案者には実践に堪える、担い手と予算を伴った「活動計画」を責任もって作成してほしいと思います。予算も活動の担い手も限られているわけですから、提案された活動計画のなかから、各年度の事業計画を立案していくことになるかと思っています。これは手続き的な話です。

この担い手ですが、水循環協は会員拡充を図ろうとしているものの、まだまだ、人材不足です。文化研の時代から活動が多様であるということを言ってきましたが、多様なことのメリットとして、多くの市民団体との接点もまた多いということが言えます。そこで、活動カテゴリー2.の「社会教育と『人の輪』の形成」のなかに「水循環健全化に取り組む市民団体・関係企業のプラットフォーム開設」という活動をあげています。このプラットフォーム立上げもすぐにできるわけではありませんが、活動展開をしていくうえで、さまざまな関係者と協働を考えることは不可欠だと考えています。そう考えて、本日は、協働の実践を積み重ねてきた佐山さんをお呼びした訳です。

これからの活動を始めるにあたり、日水コン水インフラ財団から助成をいただけることになった活動

「水循環リテラシー向上のための教材作成」について、少し紹介させていただきたいと思います。目的は、水循環の健全化へ向けた行動を実践するため、水循環との関係性の気づきや知識を行動に結びつける能力（これを水循環リテラシーと呼ぶことにします）の向上に寄与することと考えています。水循環の健全化のために市民の行動を促すことは絶対に必要です。「命の水の水守として、これまでの人と水循環の関係を見直し、次の世代に健全な水循環を継承していくことを目指す」という本会のミッションに近付くためには欠かせないことだと考えています。

とくに、この活動を進めていく過程において、

- ① 水循環協の多様な活動のハブとしての機能（活動成果をコンテンツとして集約するとともに発信する）
- ② プラットフォーム開設につなげる
- ③ 賛助会員になられた市民団体との協働
- ④ 水循環を探索する体験などを「水循環を学び楽しむ」ページに積み重ねていく
- ⑤ 重点テーマの発掘や活動課題の抽出
- ⑥ 活動の過程で集まった教材のコンテンツを活動カテゴリーの「2. 社会教育と『人の輪』の形成」において活用する

など、パンフレットに示した活動マップのかなりの領域をカバー、あるいはそれぞれの活動の端緒にしていくことを意図しています。水循環に関わる領域は、たいへん広いので、教材コンテンツの収集は、複数年かけていくつもりです。そのなかで、会員の皆さんにも関心を持たれていることがらから参加しやすいようにしていきたいと思っています。

水循環に関するアンケート結果

もう一つ、紹介したいのは、5月に会員の方を対象にアンケートをさせてもらいましたが、その結果です。これもホームページにアップしているので、そちらを見ていただければよいのですが、本日は結果を集計して感じたことと、回答者から寄せられた水循環について考えていること、会の活動についての提案をご紹介したいと思います。（回答結果のグラフは示しませんのでホームページを参照しながら読んでいただきたいと思います）

まず、回収状況です。残念ながら回収率は約30%とあまり高くありません。インターネットで回答できるようにしたのですが、いつも会報を郵送している方には郵送しました。こちらの方は、半分以上の方に回答していただきました。先ほど清水さんの発表のなかで、野川流域の方に飲み水の水源を知っているかということを探ねられたということでしたが、水に関心を寄せておられる本会の会員の方々ですから、水源を知っているという方の割合は高くなっています。水循環への関心が高いという方が圧倒的に多いということは当然かなと思うのですが、それでも、中には水循環への関心がないという人もいらっしゃいました。

(1) 水循環変容の要因／健全化のための方策

それから、どういう変化が水循環の健全性を損なうことにつながるかを聞きました。その変化が健全性を損なったかどうかは議論があるかもしれませんが、水循環に変化、変容をもたらしたものが何かということを探ねたと考えてもいいかもしれません。緑地減少・森林荒廃、あるいは、浸透面の減少が水循環に変容させたという認識をもたれているという結果でした。浸透面の減少とは都市化ということですよ

よね。ところが、都市化は水需要の増加をもたらし、取排水の変容を余儀なくするはずですが、そうしたことをあげられた方は半数に達しませんでした。私自身は回答の選択肢にあげた全てが水循環に変容をもたらし、その変容はさまざまな弊害をもたらしていると思っています。

次に、水循環の健全化を図るための手段を尋ねました。先ほどの変容を少しでも起こさないようにする、あるいは、変容はどうしても起きてしまうものなので、適応的に弊害を抑えるための手段を質問しました。私自身では必要だと考えている手段を選択肢に選びましたので、多くの方策は必要と回答されるでしょうから、そのうちのどれをとくに必要な手段・方策と考えておられるかを伺いました。

結果は、社会教育や意識改革、それと先ほど変容をもたらした要因へ対応する緑地保全などが上位に並びました。私自身、水をたくさん使うこと、これは一人ひとりがというより、人口集中により地域や流域全体でということの方が影響は大きいはずですが、その意味で、開発・土地利用規制も上位に挙がっていました。しかし、ひとり一人が「節水」するということをあげられた方が割合として少なかったというのはやや意外でした。同じように「循環」を目指している廃棄物分野の対策となっている3Rのなかで、Reduce（削減・抑制）の優先度が高いとされているのと対照的ではないかという気がします。開発・土地利用規制は社会的な水資源のReduceと考えられますが、個人でできることもだいじではないかと思います。廃棄物と比べて、このような傾向がうかがえるのは、廃棄物では商品の選択肢が多く、普段からReduceにつながる選択を意識する機会が多いのに対して、私たちが使う水の選択肢が限られていることが関係しているのかもしれません。

(2) 排水意識

その次は、我々の多くが都市で暮らしているわけですが、そこで、水を利用し、排水していることにより、水循環が変容し、豊かな川の流れが失われ、生物多様性が失われるなどの弊害がもたらされている可能性がある。こうしたことに、都市で生活するものとして責任を感じるかという問いを投げかけてみました。裏返せば、水循環を健全化するには、こういう意識、認識が必要ではないか思っているわけです。その結果、半数強の方が責任を感じると答えていらっしゃるようです。でも、仕方ない、今の水循環の変容は許容できる程度、とくに何も感じないと答えていらっしゃる方も半数近くいらっしゃいました。

「責任を感じる」と答えた方に、とくに「雨水排水」に関して3つの選択肢を示して尋ねました。その結果、ほぼすべての方が「汚染物質をいっしょに流しているのではないか」をあげられました。いわゆる、非特定汚染源について認識していらっしゃる方も少なくないということかと思います。しかし、自分の宅地から流れ出る雨水が、浸水の原因になるのではないかということは、本会の会員でもあまり意識されていないのではないかという結果になりました。これは使った水の排水と比べて、敷地内の不浸透面からの排水には意識することが少ないからだだと思います。

(3) 水循環と流域社会

最後に紹介するのは、「水循環と流域社会」に関する質問です。これは、パンフレットで示している「本会が目指す流域社会」とも関わるのですが、①東京都のように高度に都市化した地域で採用されている広域的な水利用システム（清水さんの発表なかの図3はまさにそれを示しています）をどう考えるか、②流域社会からの生態系へのインパクト、③私たちのライフスタイルとして水循環への影響を抑制するために「我慢」の許容について尋ねました。ここでいう我慢とは、水循環の保全のために利便性や効率性を我慢できるかということです。

①については、自己流域の水源を使うべきだという回答が半数を超えましたが、仕方ない、問題ないなどの回答も半数近くに及びました。現状のような他流域への依存から、自己流域を水源とする割合を増やしていくことは重要と考えられます。そのための手段もいくつか具体的に提案されるとともに、経済や社会のあり様と絡め、複眼的思考が必要であるとの意見がありました。一極集中からの脱却が一向に進まないという社会情勢のなかで、時系列的にどのような対応があり得るのかということを考えるのも、我々にとっての課題と思われます。

②の我々の流域社会が、生態系、生物の多様性に影響を与えていることについてどう思うかという質問では、ほぼ全回答者が、生態系の保全の必要性をあげており、そのために水循環へのインパクトを抑制するという回答と、今まで通りの生活や活動を続けながら生態系を保全するという回答に分かれ、それらはほぼ同数でした。

続いて、③については、「多少、利便性が損なわれることを我慢」まで含めるとほぼすべて回答者が我慢を許容するという回答でした。これらの回答は、おそらく便利過ぎるという面を感じておられるのでしょう。今享受している利便性は我慢できる余地があり、それによって水循環への影響を抑え、生態系を保全に寄与したいという意識の表れと言ってよいと思います。

(4) 自由意見

このアンケート調査で、水循環について考えていることを自由に書いてもらいました。その結果のすべてではありませんがご紹介します。水循環の健全化方策が多様なこと、水に関わる課題は今でも枚挙にいとまなしということの片鱗がうかがえます。

- グリーンインフラ、節水型社会など可能なことを地道に推進していく
- 雨水を排除するのではなく、都市でも 100%蓄えることを目指す
- 「水圏」でとらえ海洋汚染も射程に入れる：具体的には原発汚染水の海洋投棄、基地からの有機フッ素化合物を含んだ排水
- 井戸水の飲用が禁止され、地下水への関心が消えてしまった
- 子供への教育が必要

今後の本会の活動についてもアイデアを提案してもらいました。いくつかご紹介します。こうした、自由意見はホームページでは掲載していません。

- 水循環とそれに影響する因子の構造に関する研究
- 縦割りを超えた水循環の諸課題をテーマとする活動
- 文化を失わず、より安全で健全な水循環再生ができるようなまちづくり
- 環境教育冊子「水循環に及ぼす人間の活動の影響」
- 健全な水循環とはどういうことか、不健全な水循環とはどういうことかを子供たちへ教える取り組み
- 市民レベルでの活動の紹介、有識者・企業や行政の支援を引き出す取組み方の紹介

問題発見、構造化と言った研究的活動、活動教育、知識普及、そしてまちづくりにも寄与できるような活動があげられています。最後のご意見は、市民活動を実践するうえで、参考になる情報を提供されてはどうかというご意見です。

アンケートの回答は、本会会員からいただいたものですから、市民一般の方の水循環に対する意識は、大きく違っていると思います。多くの市民をターゲットにしてこのような認識形成を促すなど、今後の

活動を考えるうえで、スタート時点の状況をとらえるひとつの視点を提供しているのではないかと思います。

以上、私からの話題提供は、非常に雑ばくな言い方になってしまいましたが、これで終わります。

このシンポジウムでは、本会のこれからの活動について、とくに外部のお二人からは貴重なサジェスションなりをいただけたと思います。どうもありがとうございました。多少時間もあるようですので、福永先生、佐山さんにもう一言ずつお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【福永】水循環の健全さというのは、先ほどの清水さんのお話には河川の流量という点もありましたけれども、健全さそのものについて、社会的な論点がすごく多いだろうと思います。

健全さとは何かというのも、水循環の中身自体を具体的に示しながら、それぞれ社会的に意思決定するかというところがすごく重要だと改めて思ったしだいです。ですから、そういった意味では、さまざまなかたちで、まさに社会にどう開くのかということが重要なのかなと思っています。

開き方も、アクセスをしやすいというだけだと、アクセスをしてくれないという問題があるので、アクセスしてもらえるように、多様な活動を通して、そこにたどり着いていただけるような仕掛けを考える。言い方としては、間口は広く、でも、共通理解とか共通了解というのはなかなか難しいことなので、アートの世界でファンダメンタルズという言い方をするのですが、そういうものに手を伸ばすような仕掛けというのをつくっていかねばならないだろうなとあらためて思いました。

ですから、この会の活動が、社会に開くメソッドのようなものを溜めていくような場になると、さらにいいのかなと思ったしだいです。どちらかという、シンクタンクみたいなかたちで役割を果たすような。しかし、そのメソッドも含めて、あるいはアクセスできる人材も含めて提供できる場になるということとは必要かなと思いました。

【佐山】皆さまの発表を聞いていて、とても素晴らしいなと思いました。こちらの水循環文化研究協会がこれからますます発展していくのに、私のいただいたテーマで、人をつなげていく、もしくはいろんな情報ネットワークをどのようにこちらの会で、素晴らしい活動をしているからこそ、もっと目を向けてほしいなというところはあるんですが、逆に、こちらの会のほうで、情報をいかに持ってくるか、集められるかというところが一つキーになるのかなと思っています。

私自身は、市民による水質調査を中心に、ただ私も頼むだけではなくて、水質調査を頼んだからにはその団体が何をやっている団体か、足を運んで、その人たちと交流しつつ、それがだんだん増えていって、さらにそれが情報の集積につながり、川のその場所だけじゃ駄目だから上流も下流も行ってみよう、隣の川はどうだろう、それらをやっているところで問題点が起きるから、町ではどうなっているんだ、その地域ではどうなっているんだという話まで発展していけるかもしれません。

私個人としては広げすぎたかなというところはあるんですけども、こちらの会の会員の皆さんが、お一人お一人、いろいろ、今日のお話の中でも、例えば多摩川の水門をテーマにされてお話をされて、いろんな方と情報交換ができそうな楽しいイベントを開催しつつ、いろんな情報が得られそうな気がします。こういった交流から、いろんな人との情報交換と共有ができていくのかなと思いながら聞いていました。

今後の進め方は、地道ではあるんでしょうけれども、自分たちの会が楽しみながら、なおかつ情報交換、交流ができる仕組みづくりをされると、関わった人たちが、こちらの水循環をテーマにやってきた団

体さんというのは、こんな面白いこと、大事なことをやっているんだということで、興味関心を持ってつながっていくのかなと思います。今日はどうもありがとうございました。

【酒井】ありがとうございました。私の要旨の最後に書いてあるのですが、この助成金を得た活動をベースに、結果というよりはそのプロセスを介して、今後この会が実施していく活動にフィードバックしていけるようなかたちで進めていきたいと考えています。その過程で、今、佐山さんがおっしゃられた情報交換や交流の機会を作っていきたいと思います。

福永先生から言われたように、水循環に関わる課題を社会に開く方法、仕掛けを蓄積していけたらいいと思います。これは、清水さんが言われた課題の発信の仕方、見せ方、伝え方にもつながりますが、そういったことの工夫が必要なのですが、我々だけでできることではありません。外部の方との協働を図り、時には支援をいただきながら進めていきたい、そんなふうに思いました。

ディスカッションとうたっていたのですが、それぞれの個別の発表になってしまいました。これは、進行役を担ったこの私の責任ですが、ちょうど時間もまいりましたので、午前中のシンポジウムは終わりにしたいと思います。いただいたご意見を踏まえて、今後の活動に生かしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

【高橋】コーディネータの酒井さん、パネリストの皆さん、お疲れさまでした。十分な時間をかけた議論ができたと僕は思っております。リモートの方もたくさん参加いただいて、どうもありがとうございました。

日時：2022年6月25日（土）

場所：新宿 NPO 協働推進センター